

半七捕物帖（一）

岡本綺堂著

藤沢周平さんの時代小説の解説の中にあつた江戸の町の描写について「江戸をその目で見ていた岡本綺堂にはかなわないと思う」と書いていたのを読んでから岡本綺堂の半七捕物帖を読んでみたいと思つていました。読んだ結果、以前自分が住んでいた東京の地名が出ると当時の様子を想像するくらいはしていましたが、藤沢周平がかなわないと語つた町の描写は、残念ながら本の中でしか江戸の町を知らない自分にとっては違いが分かりませんでした。この小説は岡つ引き半七が昔に体験した捕り物の話や不思議な話を主人公である「私」に語ることで話が進んでいきます。その中に將軍の鷹を飼育管理する御鷹衆の話がありました。品川宿で逃がしてしまつた大事な御鷹を半七が探すというちよつと捕り物とは勝手が違つ話でした。何しろ捜し物は空を飛ぶ鷹。読んだ瞬間「鳥を見つけ出すなんて無茶な依頼やなあ」と思つていましたが、当時將軍以外が鷹を飼つことは禁止されていたという部分を読んで「それなら何とか見つかるかも」と淡い期待をしたのです。結局鷹は欲に目がくらんだ人たちによつて捕獲されていたことを半七は突き止め、かといつてそれを公にすると一羽の鳥のせいで四人の命がなくなると言うことに気づき内々で話をまとめる事で話が治まりました。このシリーズは半七が危ないかとも思ひながら読まなくても済むところが読みやすいなあと思ひました。

春陽文庫

F N .

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞